

## 『三四郎』のヴェニス

Junko Higasa 2014.6.15

三四郎が美禰子からの借入金を受け取ったあと、二人は美術館でヴェニスを描いた画を鑑賞する。

ヴェニスといえば一つには、漱石が好んだ画家ターナーの愛したバイロンが名付けた「ため息橋」があり、美禰子の罪を象徴するが、もっと大きく言えば「リアルト橋(Ponte di Rialto)」がある。

かつてのリアルト橋は、海上貿易の船が通行するために、木製の跳ね橋だったそうで、そこを通過する船の積荷は、現在でも市民の魚・野菜市場があるリアルト広場で取引された。すなわちリアルトは商取引—経済の一大拠点だったのである。

さて、ここで思い浮かぶのは三四郎と美禰子の金銭の遣り取りであるが、それは銀行から下ろした金が行き来するという、リアルトの商取引風景を想起させる。Bank(銀行)の語源は、北イタリアの両替商の Banco (腰掛・小机) と言われている通り、リアルトには今でいう銀行があった。

そしてヴェニスの画を鑑賞するという場面は、美禰子という商品は、市場で高値で買ってくれる人が手にするという意味にも受け取れる。それは生活の安定を男の経済に頼らなければならなかった当時の女の一面であり、英語を学ぶ先進的女の価値を象徴する。そのように、社会の迷子である「女性」という立場で、持参金を持ち、人より学識を身に付けた美禰子は、その価値に相応しい男に嫁いで行った。